

平成30年6月15日現在

機関番号：34504

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15H03420

研究課題名(和文)「小さなコミュニティ」のリスク対応力に関する研究：21世紀の生活環境主義へ

研究課題名(英文) Studies on the risk resilience of local community: Towards life environmentalism in a new era

研究代表者

古川 彰 (FURUKAWA, Akira)

関西学院大学・社会学部・教授

研究者番号：90199422

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,200,000円

研究成果の概要(和文)：研究代表者らは1980年代前半から琵琶湖岸をはじめとする集落の調査を通して、総合開発や農村近代化の変動過程における「小さな共同体」の環境保全力を明らかにし、「生活環境主義」を提唱してきた。しかし、生活環境主義については、その後の展開のなかで、地球規模あるいは国民社会レベルの構造的危機に対しては対応ができず現状追認の保守主義に陥るといった批判が生まれてきた。本研究では、生活環境主義を創設した研究者らが、新しい世代の研究者と協同して、琵琶湖岸をはじめとするさまざまな「小さな共同体」をフィールドに調査を実施し、新しい時代に対応した「生活環境主義」の可能性を検討した。

研究成果の概要(英文)：Through the survey of villages including Lake Biwa coast from the first half of the 1980s, we clarified the environmental conservation power of the “small community” in the development process of integrated development and rural modernization, and proposed “life environmentalism”. However, during the past 30 years various criticisms have been made on “life environmentalism”. In this research, researchers who established living environmentalism have collaborated with new generation researchers and conducted surveys on various “small communities” including Lake Biwa coast in the field. Based on these findings, we examined the possibility of “life environmentalism” corresponding to the new era.

研究分野：社会科学

キーワード：小さな共同体 リスク対応力 ローカルな知 生活環境主義 災害

1. 研究開始当初の背景

現代社会にあふれる災害や原発事故をはじめとするさまざまな種類のリスクへの対処については多くの議論が重ねられてきた。そうしたなかで省みられることが少なかったのが共同体、とりわけ日本の場合、農山漁村社会の「小さな共同体」のもつリスク対応力であった。

共同体が生成してきた自律的な知恵や実践の可能性については、20世紀なかばに誕生した有賀喜左衛門の生活論のなかではじめて正面から考察されるようになった。中野卓鳥越皓之らは、この有賀生活論をフィールド調査のなかで体系化し現在に発展させてきた。さらに1980年代前半、鳥越や嘉田由紀子らは、現代世界を席卷する近代的開発主義や経済合理主義と、対極の立場でそれを批判する自然環境主義の双方を斥けるなかで、「小さな共同体」の生活世界の保全を第一義とする「生活環境主義」を提唱した。「小さな共同体」の生活保全の実践こそが、地域の生態環境と生活環境の双方を両立させる鍵であり、現代社会における環境破壊に対して共同体の環境保全力に着目しその発現メカニズムを解明する研究が、「生活環境主義」の名のもとに、研究代表者等によって数多く蓄積されてきた。

生活環境主義者たちは、さまざまな方向でこの考え方にしたがって研究/実践領域を発展させてきた。しかしながら生活環境主義に対しては、提唱当初から今日にいたるまで、いくつもの批判や疑問が投げかけられてきた。そのなかで一貫して強力な批判の論点であったのは、生活環境主義では、原発事故や気候変動といった全体社会の構造自体を揺るがす対立や矛盾を捉えきれず、現状を追認/肯定するイデオロギーとして機能してしまうというものである。生活環境主義はこうした批判と疑問に対して個々に反論反証を示してきたが、個々の対応ではなく、生活環境主義モデル自体を時代にあわせて深化発展させることで新しい生活環境主義を定立することが必要であろう。それを通して「小さな共同体」のもつリスク対応の創造的力を解明することによって、生活環境主義が21世紀の現代社会を生きる人びとにとって有効な思考と実践の方法であることを示すのである。

2. 研究の目的

現代社会はさまざまな種類のリスクにあふれている。それは原発事故や気候変動のような地球規模のものから、治安悪化や薬の副作用といった身体の安全にかかわるものまで、多くの社会的次元に及んでいる。こうしたリスクへの対処については、制度的政策的なマクロで構造的な対処は、国際機関や国家の協同によって、また個人の身体の安全にかかわるようなミクロなリスクについては、「自己責任」の原則が強調されてきた。そう

したなかで省みられることが少なかったのが共同体、とりわけ日本の場合、農山漁村社会の「小さな共同体」のもつリスク対応力であった。過疎高齢化に直撃され「限界集落」と揶揄されてきたこれらの「小さな共同体」は、社会存立も困難な消滅直前の段階にあり、リスクに対しては無力な存在だとみなされてきた。こうした見方が百八十度転換したのは、311の大震災・津波と原発事故による破局的状況の出現だった。大災害にみまわれた地域において、国家などの救援制度が整う前に、「共同体」の紐帯が活用された地域の対応力の著しい高さが注目されたからだ。

しかしながら、本研究が研究の対象とするのは、こうした危機における「社会的紐帯(絆)」の重要性の確認だけではない。本研究の目的は、破局的状況の経験やそのリスクを前に、「小さな共同体」が創りあげてきた、より多面的で重層的な対応力を実証的に分析し、現代世界のリスクに有効に対処する多様なチャンネルの一つとして、「小さな共同体」の潜在力を解明することにある。

これまでの生活環境主義的研究によって、「小さな共同体」のもつ環境保全力については十分に実証できた。本研究はこの成果を踏まえ、生活環境主義に対する代表的な疑問を念頭に、4つの課題を本研究の期間内に達成することを目標とした。その4点とは、第一に、これまで共同体の境界を越えて生起する深刻で重大な危機(災害や戦争・紛争など、生活環境主義では対処できないと批判されてきた危機)に対して、「小さな共同体」はいかにそれと向き合い、対処し、その受難を生きてきたのかについての歴史的検証である。第二に、「小さな共同体」が上位の政治権力から受ける制度的政策的指示に対して、どのようにそれを受容変換しながら現実の制度/政策を実行してきたかについての政策論的検証である。第三は、「小さな共同体」のこうした(その場その場の)対処実践の積み重ねを生活思想として位置づける思想史的(文化/創造的)な検証である。そして最後の第四では、こうした日本の「小さな共同体」の実践のエッセンスを確認し、生活環境主義をあらたな危機の時代に対応するより汎用性の高いモデルとして鍛え上げるための比較社会学的検証をおこなう。

3. 研究の方法

研究代表者らが1980年代に生活環境主義を提唱するきっかけとなった琵琶湖北西岸の「小さな共同体」において、再度集約的な共同調査を実施する。長期的歴史変動と今日的变化の双方に着目し、生活環境主義のバージョンアップをはかる。前者に関しては、この共同体の270年におよぶ「村の日記」と関連史料を共通のプラットフォームとして設定する。後者に関しては、メンバーが三つのサブ領域(記憶・歴史(社会意識)系研究、政策・実践系研究、文化・創造系研究)

に所属して、「小さな共同体」のリスク対応力を検証する。共同体の歴史・実態調査を協同で実施すると同時に、「生活環境主義」のグローバル化をはかり、日本発の社会理論としての有効性を確認するために、メンバーがすでに蓄積してきた海外の「小さな共同体」を事例とした比較研究を実施する。その過程分析を通して、現代世界における生活環境主義の一般モデルを構築する。

研究代表者・分担者は、これまで長期間のフィールドワークを継続してきた地域において、下記の4点に添って災害文化の生成と実践性についてデータを収集し、比較総合する。対象とするのは、これまで甚大な水害被害を経験してきた北海道から九州までの、各分担者が現在まで長期にわたって継続調査してきた水域に位置する小さな共同体である。

本研究の方法論的特長は次の4点である。第一は、「小さな共同体」の生活世界に依拠することである。小さな共同体が経験してきた外部からの拘束や共同体自身の自律的対処の経験が本研究の基点である。第二に、歴史軸を導入することである。災害が生じた瞬間やその時代だけに焦点をあてるのではなく、共同体が生きてきた歴史的経験をとり入れる。そのタイムスパンは、現在の共同体のなかで口承や文書などで記憶化されている期間を想定する。第三は、生活環境主義的枠組である。なぜなら本研究は、生活世界システムの保全を最優先として、自然と社会を再編成していく小さな共同体のイニシアティブに着目するからである。第四は、実践的接合性の重視である。小さな共同体が生成してきた災害文化のなかに埋め込まれ、今日機能している二つのベクトル（むらの連帯の再生と地球市民的連携の導入）がいかに接合し、それが現実の実践のなかでどのような作用をしているのかについて具体的に検証する。

4. 研究成果

これまでの研究蓄積にこの3年の研究期間中の研究代表者・分担者のフィールドワークおよび議論をとおして、破局的状況の経験やそのリスクを前に、「小さな共同体」が創りあげてきた、より多面的で重層的な対応力を実証的に分析し、現代世界のリスクに有効に対処する多様なチャンネルの一つとして、「小さな共同体」のリスク対応の潜在力を解明するための研究を進めてきた。個々の研究者がこれまで長期間のフィールドワークを継続してきた地域において、下記の4つの視点に添って災害文化の生成と実践性についてデータを収集し、比較総合した。第一は、「小さな共同体」が経験してきた外部からの拘束や共同体自身の自律的対処の経験についてそれぞれのフィールドでの経験を収集した。第二に災害が生じた瞬間やその時代だけに焦点をあてるのではなく、現在の共同体のなかで口承や文書などで記憶化されて

共同体が生きてきた歴史的経験をとりいれて長期のスパンでの検討をおこなった。第三は生活世界システムの保全を最優先として、自然と社会を再編成していく小さな共同体のイニシアティブに着目する生活環境主義的枠組に準拠しながらも批判的にそれを検討してきた。第四は小さな共同体が生成してきた災害文化のなかに埋め込まれ、今日機能している二つのベクトル（むらの連帯の再生と地球市民的連携の導入）がいかに接合し、それが現実の実践のなかでどのような作用をしているのかについて具体的な検証を行ってきた。

研究の主軸になったのは、これまで長期にわたって蓄積し共有してきた、湖西地方、知内むらで270年に渡って書き続けられてきた「村の日記」と関連文書である。本研究期間中もそれらの文書の翻刻と注解、さらには文書の関連付けの作業とそれらのデータベース化を継続的にこなってきた。そして全員でこのむらの経験を分析し、現代社会のリスク対処の重要な回路として、「小さな共同体」の可能性について検討した。具体的には担当は、水害（古川・鎌谷）、紛争（土屋・鎌谷）、戦争（坂部・鎌谷）、開発（林・鎌谷）である。さらにその作業を通して、1980年代に提唱され、多くの支持と批判を生み出してきた日本発信の環境社会学のパラダイムである「生活環境主義」のバージョンアップのための議論を重ねてきた。今回のもうひとつの目的であった、生活環境主義の第一世代の研究者と、それを継承する第二第三世代の研究者が協同し、さらに海外の「小さな共同体」の実践事例を比較参照軸として提示することによって、より深化発展した生活環境主義のモデル構築の基礎作りができた（個々の具体的な内容については5の発表論文などを参照のこと）。

なお本研究の初年度2015年4月から5月にかけて、研究代表者が滞在中のネパールで大地震が発生した。都市の小コミュニティでの災害援助をおこないながら小さなコミュニティが地震の直後からどのように災害への対処をすすめていったのか、その際にどのような知が動員されていくのかを3年間にわたってつぶさに観察記録することができた。おもにネパールの災害後の小さなコミュニティの復興プロセスの調査は古川・松田・土屋がおこなった。これらの調査結果についても一部は記録として出版済みであるが、今後も継続的に参与観察を行うとともにさまざまな媒体を通して公表していく予定である。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計11件)

Motoji Matsuda, A Genesis of Street Communitarity: With Special Reference to the

Political Culture of Street Violence in Nairobi, in *Diogenes*, 査読有, pp.1-10, DOI, オープンアクセス有, 2018年, <http://journals.sagepub.com/doi/abs/10.1177/0392192117740035>

Hiroyuki Torige,

The Historic Environment in Opposition to Social Inequalities, in *Facing An Unequal World*, 査読無, pp.146-152, 2018年

鳥越皓之「農業水利技術持続発展所形成的景観」『中国農業大学学報』34、査読無、88-92頁、2017年

鳥越皓之「社会学者にとって沖縄とは何なのか」『社会学評論』67-4、査読有、482-495頁、2017年

嘉田由紀子「文理連携をめざす環境研究者の理想をいかに政策実践にむすびつけたのか? ~琵琶湖研究40年、滋賀県知事8年の経験から~」『琵琶湖の保全再生と里山・里湖 - 人と水との共生にむけて - (2015年度次報告書)』、査読無、8-27頁、2017年

Motoji Matsuda, Creativity of Narrative of Suffering of the Korean A-Bomb Survivors: How Reconciliation and Redress could be achieved?, 『京都社会学年報』24巻, 査読有, 1-16頁、2016年、<http://hdl.handle.net/2433/192232>

嘉田由紀子「いのち守りぬくまちづくり治水への想いー滋賀県流域治水条例になぜ8年もかかったのか」『国土問題』79号、査読無、7-24頁、2016年

林梅「在日中国朝鮮族のアイデンティティ エスニシティの社会的アプローチから」『朝鮮族研究学会誌』第6号、査読有、32-46頁、2016年

鎌谷かおる「近世村落史料調査試論 - 近江国をフィールドワークする - 」『新しい歴史学のために』289号、査読無、56-66頁、2016年

鎌谷かおる・佐野雅規・中塚 武「日本近世における年貢上納と気候変動 - 近世史研究における古気候データ活用の可能性をさぐる - 」『日本史研究』646号、査読無、36-56頁、2016年

土屋雄一郎「「迷惑施設」と合意形成」『都市問題』第106巻第7号、査読無、17-22頁、2015年

〔学会発表〕(計24件)

Motoji Matsuda,

Anthropological Practices and Intervention Problem: Between Academism and Activism, Cultural Anthropology Forum, Hanyang University, 2018年3月21日

Motoji Matsuda, Opening Remarks : Towards Collaboration of East Asian Anthropological Associations, 2017年12月28日

Motoji Matsuda, Opening Remarks for the

7th African Potentials Forum at Rhodes University, 2017年11月25日

林梅「「留守」を生きる村」、在日朝鮮族研究学会(特別セッション)2017年大会、2017年10月1日

林梅「エスニック集団とアイデンティティ - 在日中国朝鮮族の生活実践に着目して」、第5回中日韓文化比較研究国際シンポジウム、2017年8月20日

林梅「越境性を問う」、日中社会学会第29回大会、2017年6月4日

鎌谷かおる「近世日本における年貢制度の展開と気候変動」、社会経済史学会全国大会、2017年5月28日

松田素二「地域に学ぶプロジェクトの20年 - 大学院生による地域調査実習を通して」、竹沢尚一郎教授退職記念シンポジウム「地域にとって豊かさとは何か?」、2017年3月17日

Akira Furukawa, Closing Remarks, Workshop on "How to 'Tame' the Catastrophe: from a Perspective of Community's Potentials" 2017年3月12-13日

古川彰「枝下用水の130年を考える」、豊田土地改良区研究会基調講演(第2回豊田土地改良区公開研究会)、2017年1月25日

松田素二「探検・科学・異文化理解ヘディングの軌跡を通して考える」、文学研究科・文学部 公開シンポジウム:近代日本における学術と芸術の邂逅 - ヘディングのチベット探検と京都帝国大学訪問 -、2016年12月3日

鳥越皓之「農業技術の発展と景観の形成」、『農業技術と文化遺産』上海大学社会学院人類学・民俗学研究所、2016年11月26-27日

Motoji Matsuda, Opening Remarks from the President, The 3rd JASCA International Symposium: The Internationalization of Japanese Cultural Anthropology and the Attempt to Strengthen the Overseas Dissemination of Information, 2016年11月19日

坂部晶子「中国周辺地域における社会主義的近代とジェンダーにかんする研究視点」、『越界-人際・国際』中日学術シンポジウム及び中日社会学専門委員会成立大会 中国社会科学院社会学研究所中国社会学会・中日社会学専門委員会、北京第二外国語大学(中国・北京)、2016年11月13日

Motoji Matsuda, African Potentials to Develop Alternative Methods of Addressing Global Issues, THE 6th AFRICA FORUM, 2016年11月9-11日

松田素二「抵抗論の現在」、日本文化人類学会次世代育成セミナー東日本会場、2016年11月6日

林梅「文化資源の利用をめぐる自己と他者 中国朝鮮族村の観光化を事例に」、日本社会学会大会第89回大会、2016年10月8-9

日

林梅「錯綜する民族境界 中国タイ族の観光化を事例に」、日中社会学会第28回大会、2016年6月4-5日

鎌谷かおる「空を読む人々 - 江戸時代の日記に見る『空』へのまなざし」、第7回地球研東京セミナー「人が空を見上げるとき - 文化としての自然」、2016年1月29日

Kaoru Kamatani, Masaki Sano, Takeshi Nakatsuka, Climate-induced rice yield variations in Early Modern Japan (Edo era) recorded in Menjo (tax accounts to villages) and their implication for society-climate relationship in the past, on The Third Conference of East Asian Environmental History (EAEH 2015), 2015年10月24日

① 鎌谷かおる「江戸時代の気候変動と近江国の暮らし」、大津市和邇文化センターげんき塾、2015年10月18日

② 坂部晶子「『満洲』開拓移民の記憶と日中二つの村の近代」、国際ワークショップ「移民送出国としての中国・移民受け入れ国としての中国 人口移動を事例研究から考える」、2015年10月16日

③ 鳥越皓之「自治会や地域が小水力に取り組む意義」、高知小水力利用推進協議会、2015年6月27日

④ Akira Furukawa, Origins of "hole" - Cultural history of roadside in Nepal, Workshop on "Globalization and Local Knowledge", Jointly Organized By CNAS and VFSO, 2015年6月1日

〔図書〕(計14件)

松田素二、京都大学学術出版会、『探検家ヘインと京都大学：残された60枚の模写が語るもの』、2018年、総頁数278(205-216)

鳥越皓之、東信堂、『原発災害と地元コミュニティ』、2018年、総頁数349(5-17、245-300)

Motoji Matsuda, Palgrave Macmillan, *The Palgrave Handbook of Urban Ethnography*, 2017年、総頁数575(369-385)

松田素二、以文社、『異貌の同時代 人類・学・の外へ』、2017年、総頁数643(495-524)

林梅、明石書店、『中国雲南省少数民族から見える多元的世界 国家のはざまを生きる民』、2017年、総頁数192(123-145)

鳥越皓之、ミネルヴァ書房、『現場から創る社会学理論』、2017年、総頁数232(3-12)

嘉田由紀子、七つ森書館、『地方自治のあり方と原子力』、2017年、総頁数292(12-29)

Motoji Matsuda, Langaa RPCIG, *African Virtues in the Pursuit of Conviviality: Exploring Local Solutions in Light of Global Prescriptions*, 2017年、総頁数432(3-37, 275-308)

Akira Furukawa, Manjushree Printing

Press, *Hiranya Day Care Center: from the Eyes of Members*, 2016年、総頁数68(49-50)

坂部晶子、法律文化社、『映画は社会学する』、2016年、総頁数256(61-72)

松田素二、京都大学学術出版会、『紛争をおさめる文化 (アフリカ潜在力シリーズ第一巻)』、2016年、総頁数374(1-28)

松田素二、岩波書店、『岩波講座現代5巻 歴史の揺らぎと再編』、2015年、総頁数288(175-202)

古川彰、風媒社、『枝下用水史』、2015年、総頁数474(362-381)

鳥越皓之、九州大学出版会、『暮らしの視点からの地方再生』、2015年、総頁数358(329-349)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

古川 彰 (FURUKAWA, Akira)

関西学院大学・社会学部・教授

研究者番号：90199422

(2) 研究分担者

鎌谷 かおる (KAMATANI, Kaoru)

総合地球環境学研究所・研究部・特任助教

研究者番号：20532899

林 梅 (LIN, Mei)

関西学院大学・社会学部・准教授

研究者番号：20626486

松田 素二 (MATSUDA, Motoji)

京都大学・文学研究科・教授

研究者番号：50173852

坂部 晶子 (SAKABE, Shoko)

名古屋大学・人文学研究科・准教授

研究者番号：60433372

嘉田 由紀子 (KADA, Yukiko)

びわこ成蹊スポーツ大学・スポーツ学部・学長

研究者番号：70231256

(平成29年11月10日削除)

土屋 雄一郎 (TSUCHIYA, Yuichiro)

京都教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：70434909

鳥越 皓之 (TORIGOE, Hiroyuki)

大手前大学・総合文化学部・教授

研究者番号：80097873